

“現代のジャズ・メッセンジャーズ”と呼ばれるワン・フォー・オールが結成されたのは1997年のことだ。ニューヨークのジャズ・クラブ「スモールズ」出演のため、エリック・アレキサンダーが中心になってメンバーが集められた。フロントを飾るのは、テナー・サクスの彼とトランペットのジム・ロトンディ、そしてトロンボーンのスティーブ・デイヴィスである。その3ホーンにピアノのデヴィッド・ヘイゼルトインが中心になったリズム・セクションを組み合わせて、3管セクステットによるワン・フォー・オールは誕生した。

グループは、1960年代初頭にウェイン・ショーター、リー・モーガン（あるいはフレディ・ハバード）、カーティス・フラーを擁した3管メッセンジャーズを手本に、現代のハード・バップを追求すべく、これまでに優れた作品を何枚も発表している。その最新作がお手元の『キラー・ジョー』だ。

ワン・フォー・オール誕生のきっかけは、それよりしばらく前の1988年にさかのぼる。まだ無名だったロトンディとアレキサンダーとドラマーのジョー・ファンズワースが仕事で顔を合わせたのが始まりだ。その後にファンズワースが、元ジャズ・メッセンジャーズのトロンボーン奏者であるデイヴィスをメンバーに紹介し、1996年になってヘイゼルタインとベーシストのピーター・ワシントンがそこに加わってくる。

こうして陣容が整ったワン・フォー・オールは、しかしながら全員がニューヨークのジャズ・シーンで多忙を極めているため、なかなか定期的なライブを行なうことが難しい。へたをするとレコーディングのためだけのグループになってしまうところを、全員の熱意によって年に数回のキグをこなすことでワーキング・バンドとしての存在感を保っているのが現状だ。

アルバムは現在までに9枚を発表し、今回の作品が10枚目にあっている。年に1枚以上のペースで8年間にわたってそれを維持してきたことは、浮き沈みの激しいジャズ界にあって非常に珍しい。メンバーもベーシストだけピーター・ワシントンからレイ・ドラモンドや、今回はヴェテランのデヴィッド・ウィリアムスが参加するなど、交代劇も認められるが、これだけの期間、同じ顔ぶれでグループを存続させてきたことは評価に値する。

エリック・アレキサンダーは1968年8月4日にイリノイ州のゲイルズバーグで生まれた。当初はアルト・サクス奏者としてクラシックを学んでいたが、高校時代にジャズに目覚め、ニュージャージーのウィリアム・バターソン・カレッジでジャズ・テナーを習得。卒業後シカゴでボン・フリーマン、チャールス・アーランド、ジャック・マクダフなどのグループで活躍。1991年にはモンク・コンペティションでジョシュア・レッドマンに次いで2位となる。現在はニューヨークに移って活躍中。

ジム・ロトンディは1962年8月28日にマサチューセッツ州のバットで生まれた。母親がピアノ教師だったことから、8歳でピアノのレッスンを開始している。トランペットを吹き始めたのは12歳からで、ノース・テキサス大学卒業後の1985年からプロとしての活動をスタートさせる。ジャズ・ミュージシャンとして頭角を表すのは1991年にジュニア・クック=セシル・ペイン・クインテットに参加してからで、以後はライオネル・ハンプトン、ジョージ・コールマン、マイケル・ワイズ、ルー・ドナルドソン、エリック・アレキサンダーなどのグループで活躍してきた。

スティヴ・デイヴィスは1967年4月14日にマサチューセッツ州のウースターで生まれた。その後ニューヨーク州のビンガムトンに移ってそこで育つ。祖父や父親の影響で音楽に興味を持ち始め、10歳のころからトロンボーンを吹くようになった。やがて本格的な音楽の勉強がしたくなり、ジャッキー・マククリーンがディレクターを務めるコネティカット州ハートフォードにあるハート大学の音楽学部に入学。卒業後の1989年以降はニューヨークに進出し、同年からアート・ブレイキー率いるジャズ・メッセンジャーズに参加してたちまち脚光を浴びる。

デヴィッド・ヘイゼルタインは1958年10月27日にウイスコンシン州ミルウォーキーで生まれた。母親が歌手兼ギタリストという環境に育ち、子供のころから一緒にテレビ出演していたという経歴を持つ。最

- Killer Joe**
キラー・ジョー

One For All
ワン・フォー・オール

 - キラー・ジョー**
Killer Joe （B. Golson）（6：14）
 - アイランド**
Island （E. Alexander）（6：44）
 - 夜霧のブルース**
Night Mist Blues （A. Jamal）（11：02）
 - メイティング・コール**
Mating Call （T. Dameron）（6：49）
 - ホット・サケ**
Hot Sake （S. Davis）（10：29）
 - セイ・ホエン**
Say When （J. J. Johnson）（6：20）
 - クリフォードの想い出**
I Remember Clifford （B. Golson）（7：03）
 - ユー・ノー・アイ・ケア**
You Know I Care （D. Pearson）（6：26）

エリック・アレキサンダー Eric Alexander （tenor sax）

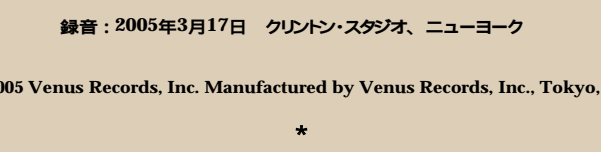
ジム・ロトンディ Jim Rotondi （trumpet）

スティーブ・デイビス Steve Davis （trombone）

デヴィッド・ヘイゼルタイン David Hazeltine （piano）

デヴィッド・ウィリアムス David Williams （bass）

ジョー・ファンズワース Joe Farnsworth （drums）



録音：2005年3月17日　クイントン・スタジオ、ニューヨーク

© © 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at Clinton Studio in New York on March 17 , 2005.
Engineered by David Darlington . Assistant : Wes Lupold.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kifamura and Tetsuo Hara.
Front Cover : © Frank Horvat / G. I. P.Tokyo. Designed by Taz.

初の楽器は8歳のときに弾き始めたオルガンで、14歳でピアノに転向。影響を受けたのはオスカー・ピーターソンとシダー・ウォルトンで、13歳のときから地元のジャズ・クラブで演奏活動を開始している。その後はチャェット・ベイカー、ソニー・スティット、チャールス・マクファーソンたちと共演し、21歳でニューヨークに進出。

デヴィッド・ウィリアムスは1946年9月17日に西インド諸島のトリニダードで生まれた。音楽一家の出で、少年時代にロンドンに移住。1969年にニューヨークに本拠地を移し、この年にビーヴァー・ハリスのバンドに加わって注目を集めた。その後はチャック・マンジョーネ、ロバータ・フラック、オーネット・コールマン、ドナルド・バードなど、幅広い活動で知られ、1980年代半ばからはシダー・ウォルトン・トリオのメンバーとして評判を獲得している。

ジョー・ファンズワースは1968年2月21日にマサチューセッツ州のホリヨークで生まれた。音楽一家に育ち、アート・テイラーやアラン・ドゥソンに師事し、1986年から90年にかけてはニュージャージーのウィリアム・バターソン・カレッジで学ぶ。卒業後の1991年からジュニア・クックのバンドに参加し、その後はジョージ・コールマン、セシル・ペイン、アーニー・ロス、ジョン・ヘンドリックス、ジョン・ファティス、ベニー・グリーン、ベニー・ゴルソンらと共演して現在に至る。

演奏紹介

1. キラー・ジョー

テナー奏者にして名作曲家として知られるベニー・ゴルソンの代表的なオリジナルでアルバムは幕を開ける。ミディアム・テンポで3ホーンが堂々とした風情で繰るテーマからぞくぞくするような演奏だ。続くアレキサンダーのソロもどっしりと構えていてモダン・ジャズの王道を感じさせる。そしてきらびやかな響きを伴うロトンディのトランペット・ソロへとパトン・タッチされる。デイヴィスのソロもリラックスしたムードで快演と呼ぶに相応しい。しっかりとしたタッチを聴かせるヘイゼルタインは相変わずの快調ぶりだ。まずはソロイスト全員が、挨拶代わりに短いながらもソロを披露するといったところか。

2. アイランド

グループの中心人物であるアレキサンダーのオリジナル。ロトンディとアレキサンダーがテーマを提示したあとは、デイヴィスのソロから始まる。次のアレキサンダーによるプレイが、豪快かつ変化に富んだ内容で見事だ。その後はウィリアムスの表情豊かなベース・ソロがフィーチャーされて、演奏はエンディング・テーマへと向かう。

3. 夜霧のブルース

シカゴ派のピアニスト、アーマッド・ジャマルが書いたオリジナル。ミディアム・スローの演奏が落ち着いた雰囲気を感じし出す。ジャマルはブルーギーなプレイに定評のあるひとだ。それだけに、このオリジナルも翳りを帯びたブルースとして、ワン・フォー・オールの面々が演奏していく。本作で一番長いトラックになったのは、各ソロイストが存分に思いをプレイに託したからだ。ロトンディ、アレキサンダー、デイヴィス、ヘイゼルトイン、ウィリアムスと、ドラムスのファンズワースを除く全員がソロを取り、個性を發揮した内容で競い合う。

4. メイティング・コール

ビバップからハード・バップの時代にかけて活躍したピアニストのタッド・ダメロンは、一方でジャズ・ミュージシャンがこぞって取り上げたがる名曲をいくつも発表してきた。中でも、この曲はハード・バップ時代に残された傑作として有名だ。それをワン・フォー・オールが迫力満点の演奏に仕上げてみせる。火の出るような熱いソロが、一番手のデイヴィスから連続する。まるで現代のJ・J・ジョンソンを思わせるのがここでの彼だ。アレキサンダーの嫺爽としたテナー・ブローも痛快この上ない。スピーディなプレイの中にハード・バップの魂が息づいた演奏だ。ロトンディの見事にコントロールされたソロも素晴らしい。身上である変幻自在なフレージングを駆使して、彼がご機嫌なプレイに終始する。ヘイゼルタインの強力で正確無類のタッチも圧巻だ。最後はファンズワースのドラム・ソロがホーン・アンサンブルの台間に紹介される。

5. ホット・サケ

日本最良のデイヴィスが書いたオリジナル。リズムに特徴があるナンバーで、3管時代のジャズ・メッセンジャーズを思わせるテーマ・メロディとアプローチとホーンの響きに、にやりとさせられるファンも多いはずだ。男性的なトーンで迫るアレキサンダーのソロから始まり、高音部を効果的に用いるロトンディ、スケールの大きなところを示すデイヴィス、緩急自在にフレーズを積み重ねるヘイゼルタインと、聴きどころ満載のパフォーマンスとなった。

6. セイ・ホエン

超絶技巧によってモダンなトロンボーン奏法を開発したJ・J・ジョンソンの代表作。それだけに、テーマ・パートから同じ楽器を吹くデイヴィスが活躍する。そのまま彼のソロへと移るが、この自信に溢れた吹奏は見事だ。それを受けたアレキサンダーもハード・パビッシュなフレーズを多用して豪快なプレイを披露する。3番手のロトンディも創造性を發揮して流麗なプレイを繰り広げる。次のヘイゼルタインは、バック・ビートに乗せてシングル・ノートを多用するソロでこれまた個性を發揮していく。そして最後にデイヴィスとファンズワースの小節交換がフューチャーされて、快適な演奏は終わりを告げる。

7. クリフォードの思い出

再びベニー・ゴルソンの曲が取り上げられる。天才トランベッターの名をほしいままにして、25歳で交通事故死を遂げたクリフォード・ブラウンに捧げた美しいバラードである。3ホーンがテーマ・パートを分かち合い、その後はアレキサンダー、ロトンディ、そしてヘイゼルトインが歌心を込めたソロで表現力を競い合う。

8. ユー・ノウ・アイ・ケア

ミディアム・テンポによる快適な演奏でアルバムは幕を閉じる。まずは3本のホーンが織り成すアンサンブルによってテーマが演奏される。その後はスピーディなプレイを連続させるロトンディ、小刻みなフレーズから次第に楽想を膨らませていくアレキサンダー、流れるような音遣いが心地よいヘイゼルタインの順でソロが登場し、再び3ホーンが複雑に絡みながらのテーマ・メロディへと至る。

[[c]WINGS 05062296：小川隆夫/TAKAO OGAWA]